

セクシュアリティと狂気——ミス・ササガワラと強制収容所

新井 透

Hisaye Yamamotoは1921年、カリフォルニア州リンド・ビーチに生まれた日系二世である。両親はトマトやイチゴを栽培する農民であったが、1913年の外国人土地法によって市民権のない日本人移民は土地を所有することができず、借地をしては南カリフォルニアを転々としていた(Yamamoto 1994, 77)。ヤマモトはすでに14歳の頃から、ナポレオンというペンネームで『加州毎日新聞』の英文欄に投稿を始め、18歳頃には定期的にエッセイや詩、書評などを寄稿していた(Cheung 1994, 6, 植木 42)。

1941年12月7日、日本軍の真珠湾奇襲攻撃の直後、FBIはハワイや西海岸に住む一世指導者を一斉に検挙した⁽¹⁾。新聞やラジオなどのメディアに扇動された市民や地元政治家の圧力による排日運動が高まるなか、翌年2月19日、フランクリン・ローズベルト大統領は行政命令第9066号を発した。これによって太平洋岸に住む約12万人の日系人——3分の2はアメリカ市民である二世——は、人里離れた内陸部の砂漠地帯や山岳地帯の10か所の再定住センター（強制収容所）へ強制的に移住させられた。そこは鉄条網に囲まれ、監視塔には兵士たちが銃を向け、日系人を監視していた。こうした傍若無人で非人道的な政策は、日系人に計り知れない屈辱感と精神的苦痛を与え、また長期にわたってまったく予測のつかない不安な状態から精神病患者や自殺者まで出たという(タカキ 301, 竹沢 115, 上杉 110,)。

ヤマモトも21歳の時、アリゾナ州のポストンで収容所生活を送った。砂漠特有の砂嵐と灼熱の気候で、ポストン収容所は“Toaston, Roaston, Duston”といったニックネームをつけられたといわれている(Matsumoto 481)。この時の体験を基に彼女は“The Legend of Miss Sasagawara”（「ササガワラ嬢の伝説」）を1950年に発表している。ヤマモトによれば、表題のミス・ササガワラには実在のモデルがいたそうである⁽²⁾。

ポストンは他の多くの収容所のように、かつて豊かな大地に住んでいたアメリカ先住民が白人によって追い立てられ、人の住まない不毛の地に保留地（リザーベーション）として囲いこまれた場所である。19世紀におけるアメリカ先住民の強制移住にしても、1942年における日系人の強制収容についても、それぞれ人種的偏見に基づいたアメリカ社会や政府による不正な処置として、アメリカ史に刻みこまれるべき重大な汚点であると言えるだろう。ヤマモトはこの体験によって、これまで漠然としか感じていなかった人種差別の現実に、初めて直面することになった⁽³⁾。まだ日系人への差別、偏見が払拭されていなかった1950年において、彼女はあからさまにアメリカ政府を批判することはできなかつたと思われるが、強制収容の犠牲者であるヒロインのセクシュア

リティと狂気の言説を通して、日系アメリカ人に対する強制収容の非人間性を訴えている。

ヤマモトは収容所の体験が二世作家たちにとって不可欠な要素であると次のように発言している⁽⁴⁾。

Any extensive literary treatment of the Japanese in this country would be incomplete without some acknowledgement of the camp experience. It was a trauma which many Japanese who were incarcerated choose to ignore today, on the grounds that it is past history, over and done with, or that it is simply not a very interesting topic to bring up...It is an episode in our collective life which wounded us more painfully than we realize. (Yamamoto 1994, 69)

上記の引用にあるように、強制収容という過去の記憶は多くの日系人にとって集団的なトラウマになっているのである。ヤマモトは後に「追放1942年—45年」という題名の自伝的な詩を書いている(『日系アメリカ・カナダ詩集』9-11)。そこには1942年5月15日、家族とともに南カリフォルニアのオーシャンサイドを追われ、列車で収容所のある内陸部へ連れていかれる不安と、その後の収容所内における息苦しい生活が描かれている。また日系カナダ人作家Joy Kogawaも代表的作品、*Obasan*(1983)で住み慣れたバンクーヴァーを強制的に立退かされ、列車で内陸部へ送られる日本人移民の姿を幼い少女の視点から印象的に書き記している。

公民権運動や黒人解放運動に触発され、1970年代以降、アジア系アメリカ人という民族的ナショナリズムが高揚し、これまで差別、抑圧されていた人種的マイノリティの人々の歴史の問い直しが行なわれるようになった。いままで封印されていた過去の記憶が甦り、日系人の強制立ち退き・強制収容に対する補償請求運動が始まった。その結果、1988年、レーガン大統領による公式な謝罪と賠償法案への署名がおこなわれ、強制収容の問題は一区切りついたように思われるが、いまだに多くの日系人にとって、世代を越えて忘れられない出来事として記憶されている(Takami 88-89)。本論ではこうした強制収容所という閉じこめられた空間において、強い自我意識を持つがゆえに従来の性役割を逸脱した女性について、これまでのステレオタイプな女性の表象に対してヤマモトはいかに反逆したか、また女性のセクシュアリティの探求と狂気について正面から取り組んでいたことを明らかにしていく。

1 逸脱の刻印

“The Legend of Miss Sasagawara”は、キクという若い女性を通して、マリ・ササガワラというバレエ・ダンサーの数奇な運命が語られている。この作品は1950年に南部のニュークリティシズムの批評家たちが編集していた*Kenyon Review*誌に掲載された。前作の“Seventeen Syllables”

セクシュアリティと狂気——ミス・ササガワラと強制収容所

は1949年に進歩的な左翼雑誌*Partisan Review*に掲載されており、ヤマモトは日系人の中でも、戦後もっとも早くから全国的雑誌で認められた作家のひとりである(Rolf 90)。彼女の短篇小説はこれまで高い評価を受け、いくつものアンソロジーに掲載されており、最近書かれたものを含め1988年には*Seventeen Syllables and Other Stories*が単行本として出版されている。

「ミス・ササガワラの伝説」の最初の部分で、ヒロインの容姿について書かれているが、身体の表象はこの作品では重要な意味をもっている。

Even in that unlikely place of wind, sand, and heat, it was easy to imagine Miss Sasagawara a decorative ingredient of some ballet, her daily costume, brief and fitting closely to her trifling waist...her shining hair was so long it wound twice about her head to form a coronet; her face was delicate and pale, with a fine nose, pouting bright mouth, and glittering eyes... (20)

砂漠の荒野にある収容所内に、いわば閉じこめられていた日系人たちにとって、彼女の存在は単調な日々を紛らわすのに余りあるものであった。武装兵士が監視する有刺鉄線の内側で、彼女は囚人のように幽閉された状態においても、他の日系人たちのなかでひと際目立っていた。当時の収容所の写真でもわかるように⁽⁶⁾、荒涼とした風景のなかでおよそふさわしくない華麗なバレリーナの衣装や優美な容姿は人目につかずにいられなかった。ミス・ササガワラはアウトサイダーとして排除され、男たちからは「見られる性」として、つまり欲望の対象としてのメタファーになっている。

彼女は僧侶の一人娘であり、母親は既に亡く父親と二人で途中から収容所に入ってきた。彼女は39歳の独身女性であったが、実際の歳よりもずっと若く見え、男性だけでなく女性からも注目を浴びるほど美しく魅力的である。キクの友達エルシーはミス・ササガワラについて次のように語っている。

She said she was thirty-nine years old—imagine, thirty-nine, she looks so young, more like twenty-five; but she said she wasn't sorry she never got married, because she's had her fun. She said she got to go all over the country a couple of times, dancing in the ballet (21).

上記の引用にあるように、ミス・ササガワラは結婚という家父長的家族制度の中に閉じこめられる産む性（水田『フェミニズムの彼方』1991, 11）からはみだして、自己を表現すること、つまりバレエ・ダンサーとして美を追求することを選んだのである。しかし戦争の勃発によって日系人は集団で辺鄙な場所に隔離され、彼女は自己表現の場を奪われてしまった。収容所の人々は彼女の美しさ、そして結婚しない女に対する好奇心とある種の偏見によってより一層彼女に関心

を抱くようになった。彼らはマリという名前を呼ばないで、適齢期を過ぎた未婚女性をあてつけるように、ミス・ササガワラという呼び方をして彼女を疎外している (Cheung 59)。家父長制家族制度を再生産する結婚と生殖を拒否した彼女は、逸脱した女として共同体から奇異の目で見られていたのである。その結果、彼女はつねにそうした視線を意識せざるをえず、またこのようなプライバシーのない収容所内の生活は、バレエ・ダンサーであった彼女の繊細な心を徐々に踏み躪ってしまったといえるだろう。

日系アメリカ人二世の画家 Mine Okubo は自ら体験したユタ州のトパーズ収容所の人々の様子をスケッチに表し、エッセイを書き加えて、1946年にコロンビア大学から *Citizen 13660* というスケッチ集を発表した。それによるとトイレやシャワーなどは仕切りがあるだけで丸見えで、若い女性は深夜、人気のない頃を見計らってシャワーを浴びたという (Okubo 74~75)。

語り手の「わたし」(キク) もまた夜遅くシャワーを浴びにいて、ミス・ササガワラに偶然会う描写がある。

Once, when I was up past midnight writing letters and went for my shower, I came upon her under the full needling force of a steamy spray, but she turned her back to me and did not answer my surprised hello. I hoped my body would be as smooth and spare and well turned when I was thirty-nine (22).

彼女は他人の視線を避けたがっており、同性のキクに対しても背を向けている。しかし彼女は決して人間嫌いなのではなく、むしろ疎外されて痛ましいほど自分の殻に閉じこもっているのである。周囲の人々が彼女をエキセントリックな女として他者化するのに対して、キクはむしろ彼女にある種の憧れを抱いて理解しようと努めている。

キク以外の証言者たちは、ミス・ササガワラの奇妙な行動の背後にある人間の苦悩を理解せず、彼女に対して冷淡で興味本位に考える。たとえば、キクとエルシーが彼女の家の前を通りがかったとき、エルシーは彼女に挨拶をしたのに無視されたとして腹を立てる。これに対し、キクは全く冷静にその時の事情を分析している。

We were almost out of earshot when I heard her call, "Do I know you?" I could have almost sworn that she sounded hopeful, if not downright wistful, but Elsie, already miffed at having expended friendliness so unprofitably, seemed not to have heard, and that was that (22).

上記の引用は一例にすぎないが、このようにミス・ササガワラはエルシーだけでなく、多くの人々から誤解されてしまう。しかしそれは今まで述べてきたように、彼女に対する偏見からくる、

半ば故意の誤読なのである。

マリ・ササガワラは人前にでることがほとんどなく、食堂にも姿を見せず、父親が娘の食事を持っていく。周囲の興味本位の視線を意識する彼女は公共の場や、開かれた空間に対して病的な恐怖心を抱いている（ギルバート他 77）のではないだろうか。一方で周囲の人々は彼女をとて「気性の激しい」（temperamental）女であると考え、隣人のササキ夫妻は彼女を“crazy”だとか、“madwoman”と呼ぶ。ここでも彼女を狂気に結びつける恣意的な言説が認められる。同じブロックの若い男たちは、彼女のしなやかな身体を性的な存在として想像しながらながめ、彼女は「見られる性」としてスティグマ化されている。そこには性役割を放棄した女性——結婚しない女性に対して不当な性的重圧が課せられている（水田 1986, 66）。収容所内において一世である父親の権威は急速に衰え家父長制は弱体化したといわれているが、それでも女としての規範を逸脱した彼女を異質なものとして排除しようとする思惑が増幅されていく。

2 女の狂気

・・・ヒステリー症や鬱病・・・といった女性の狂気は、性の抑圧に抗する心身の自己表現の回路なのであり、それは隠蔽されるのではなく、語られるべき物語である・・・（水田『ニューフェミニズム・レビュー』1991, 34）

収容所は徐々に整備され、学校が建てられて子どもたちは教育を受けることができるようになる。また勤労意欲のある人には職を与えられ、白人と比べると給料の格差は大きかったが（島田 79）、食堂、建築、管理事務、病院等の一般労働は月額16ドル、専門職や監督は月額19ドルの給料で働くことができた。ユタ州のトパーズ収容所では白人の農場に従事する人もいた。キクとエルシーは病院に勤めてミス・ササガワラの奇異な行動を目撃することになる。

ミス・ササガワラは深夜、キクが受付けをしている病院棟まで歩いてやってきて、体の不調を訴える。医師の診察の後、救急車で送っていかうとするが、彼女はどうしても聞き入れず、遠い道程を深夜にもかかわらず歩いて帰ろうとして周囲を困惑させる。彼女は一月後に再び病院を訪れ再び体調不良を訴えるが、エルシーがその時の様子を次のようにキクに語る。

Well, she came in last night, and they didn't know what was wrong with her, so they kept her for observation. And this morning just now she ran out of the ward in just a hospital nightgown and the orderlies chased after her and caught her and brought her back (26).

前回同様、医師は彼女の病状を特定することができない。そこには女性の身体と精神の不調を

結びつけるヒステリー症状が暗示されている。エルシーによれば、医師が病院を抜け出した理由を問い正すと、ミス・ササガワラは次のように答えたという。“She said she didn't want any more of those doctors pawing her (26).” “pawing”には「(女性に) 触れる」という意味があり、明らかにセクシュアルな響きがあるが、一方「不器用に扱う」という意味もあり、日系人医師たちに対する不信感をも示している。すなわち一度は引退したという老医師や、戦争によって繰り上げ卒業した未熟な若い医師への不信感である。エルシーは明らかに前者の意味をキクに伝えている。なぜなら誰もミス・ササガワラの訴えを真剣に聞こうとせず、独身の彼女に対して性的なコノテーションを無理矢理結びつけようとし、一方では隣人のササキ氏のように彼女を狂った女とみなすのである。武田が指摘しているように、女性の過剰なセクシュアリティとヒステリー症はこれまで意図的に関連づけられてきた(127)。冒頭の彼女の際立って派手な衣装——性的アピールではなく、これは彼女の一種の身体表現にもかかわらず、周囲の人々はそのように理解しようとはしない。

ミス・ササガワラが病院関係者だけでなく、患者たちの好奇心に満ちた視線にもさらされ、精神的にますます不安定になっていく様子を語り手は痛ましく感じている。

With her head slightly bent, she was staring at a certain place on the floor, and I knew she must be aware of that concentrated gaze... There was no future to watching such a war of nerves as this... (26 ~27)

ここでも「見られる性」が反復されている。彼女は視線によって汚され、歪曲され、裸体に還元されたイメージ(チョウ 28)が刻印される。前述のように日系人たちの多くが差別され、主流社会への門戸が閉ざされていたのに対して、彼女は戦前バレエ・ダンサーとして全米をまわって活動していた。日系人社会の指導的立場にあった僧侶の娘という階層に加えて、自由奔放な生き方をする彼女に対して、同性である女性たちの間でも羨望の的であり(21)、また冒頭にあるように華麗な衣装や優美な肉体は若い男性の注目を浴び、同時に彼らは嫉妬に近い感情を抱いていたのである。またキクやエルシーがハンサムで金持ちの若者との平凡な結婚を夢見ているのとは対照的に、彼女は自立を求め性役割に安住することを拒否する。その結果、閉塞状態にある収容所内の日系人社会から排除され、彼女は変り者、あるいは異常者としてみなされるようになる。彼女がフェニックスの精神病院に隔離されるのは象徴的なことである。なぜなら彼女は周囲から狂気の烙印を押されていたからである。

ミス・ササガワラは数ヵ月後に病院を退院すると、以前とは考えられないくらい変貌を遂げて周囲を驚かせる。キクがシャワーを浴びにいくと、彼女は前回とは違って今度は愛想よく話しかけてきた。

“Aren't you a girl who plays the violin?”

I giggled and explained. “Elsie and I, after hearing Menuhin on the radio, had in a fit of madness sent to Sears and Roebuck for beginners' violins that cost five dollars each” (28).

上記の引用は、ヤマモトが実際にラジオで天才ヴァイオリニストのメニューヒンの演奏を聞いて、近所の女ともだち（ジーン）とシアーズの通信販売で、5ドルのヴァイオリンを手に入れ、毎日練習したという自伝的な詩「ポストン その1」（『日系アメリカ・カナダ詩集』12-18）と一致する。キクにとってミス・ササガワラは周囲がうわさするような変人ではなく、きわめて普通の女性なのである。音楽という共通の話題を通して、彼女は初めて笑顔を見せ楽しそうに話す。これまで彼女は詮索好きな人々の視線に耐えられなかったために、他人と接したいというごく普通の感情を抑えていたと思われる。キクのような芸術を理解できる女性には彼女も心を開くことができ、熱っぽく語りかけるのである。Cheungが指摘しているように、ミス・ササガワラがボランティアで子どもたちにバレエを教えたのも人間関係を希求していた結果である（62）といえる。

1943年2月にいわゆる忠誠登録が実施され、合衆国に忠誠を誓った二世たちは収容所から出ることを許され、東部や中西部へ新たな生活を求めて移住した。Monica Soneの*Nisei Daughter* (1953) やYoshiko Uchidaの*Desert Exile* (1982) などに描かれているように、帰米二世を中心として忠誠を拒否するものがいたが、多くは米軍に志願したり中西部や東部の大学へ進学したり、あるいは職に就くなどして社会復帰していった。

キクもまた強制収容所を出て、遠くフィラデルフィアの大学に入学する。休暇を利用して戻ってくると、エルシーからミス・ササガワラについて不可解な話を耳にする。ひとつは彼女がヨシナガ家の男の子たちが遊んでいる姿を陶酔したように見えて、隣人のササキ夫人に注意されたことに対する異常な反応である。

Mrs.Sasaki had cried, “You're old enough to be their mother.” Startled, Miss Sasagawara had jumped up and dashed back into her apartment. And when Mrs.Sasaki had gone into hers, adjoining the Sasagawaras', she had been terrified to hear heavy like a hammer (31).

なぜ彼女はこのように怒り狂ったのであろうか。上記の引用にある「母親」という言葉がキーワードになっていると仮定することもできる。ヤマモトの作品で“Yoneko's Earthquake” (1951) の中ではヨネコの母が若いフィリッピン人労働者と親密な関係になって、その結果妊娠してしまい、夫から墮胎手術を強要される。あるいは“Seventeen Syllables” (1949) では、ロージーの母が過去に自分と身分の違う男と性的関係を結んで、やはり身籠もった子を墮ろしたと娘に語って

いるように、ミス・ササガワラもまた若いときに子どもを失っているのではないだろうかという推論も成り立つ(Cheung 61)であろう。つまり彼女は男の子をうっとり眺めていたり、母親という言葉に敏感に反応したのだと考えることもできる。上記のヤマモトの二つの作品には「産む性の呪縛」から解放されない一世の女性たちの運命に対するあきらめが描かれているが、「ミス・ササガワラの伝説」の場合はあいまいにされている。

またササキ夫人がミス・ササガワラの態度に対して、抑圧された愛情や欲望を指摘したために逆上したと考えることもできるだろう。彼女の男嫌いが欲望の抑圧によるものであるとすると、少年への愛は大人の男に対する愛情の代償行為ではないだろうか。大人の男への情熱は性愛へと発展し、産む性としての女性の身体が意識されるが、少年への欲望は性愛とは無関係な精神的な愛である。またそこには倒錯的な母性愛が暗示されている。それはエルシーがキクに語るもうひとつの出来事、すなわちミス・ササガワラが何度もジョー・ヨシナガの部屋に夜中に忍びこんで、少年の寝顔を明け方までじっと見守っていたという話にも関連する。白い寝間着姿で長い髪を垂らして男の子の側に座っている姿は幽霊のようで、またグロテスクでもある。ここには閉鎖的な小さな田舎町において、孤独や抑圧された性、グロテスク、狂気などをテーマにしたSherwood Andersonの*Winesburg, Ohio* (1919)の影響が垣間見られないだろうか。ワインズバーグの孤独な登場人物たちのように、常軌を逸した行動をとったとしてミス・ササガワラもまた追放され、カリフォルニアの病院へ送られてしまうのである。

キクはミス・ササガワラの不審な行動の原因を、大学で学んだ精神分析的解釈に従って彼女がジョーのことを今は亡き恋人か、あるいは息子と同一視したのだとエルシーに冗舌に説明してみせる。しかし同時にキクは周囲の人間たちのゴシップ話をあまりにも安易に鵜呑みにしてしまっていて、彼女の実像を見失っているのではないかと不安になってしまう。証言者たちは39歳の未婚女性に対する偏見と好奇心から、誇張して過剰なセクシュアリティとヒステリー症を結びつけているのである。ここで読者は、ミス・ササガワラについてのこれまでの物語に対して見直しを迫られる。ヤマモトは女性のセクシュアリティをセックスへと還元してしまう解釈、すなわち性的抑圧=ヒステリーという女のセクシュアリティの一義的還元から、多義性を含んだ解釈に読みかえようとする(武田 236~38)。

前にも述べたように、ミス・ササガワラの背後には父親の姿が見え隠れしている。水田は、フォークナー(William Faulkner)の短篇小説“A Rose for Emily”(1930)におけるヒロイン、エミリー・グリアスンの狂気について論じている中で、「父親の抑圧による娘の性の未成熟と精神障害」(水田『フェミニズムの彼方』1991, 44)を指摘しているが、それはミス・ササガワラにも当てはまるのではないだろうか。彼女の父もエミリーの父と同様、娘に対して保護者として、また支配者として君臨し、娘は狂気によって父親に反逆するという共通した関係が見られる。また白い寝間着を着たマリは、常に白い衣装を身につけていた19世紀アメリカの女性詩人エミリー・ディ

キンズンを思い起すこともできるだろう。フォークナーの「エミリーへの薔薇」にも抑圧的な父親に反逆するディキンズン像が含意されている。

4 娘の反逆

キクは大学へ戻ったとき、たまたま小さな詩の雑誌の中でミス・ササガワラの名前を目にする。ヤマモトはこれまで彼女の内面を語る事がなかったが、初めて彼女の胸の内の苦悩が明かされる。つまり理性のディスコースによって排除され、言葉を奪われ沈黙を余儀なくされた彼女が狂気によって自分自身を表象する（前掲書 36）。常軌を逸脱していると周囲から思われていた女性が自己分析的な詩を書いていたのである。

“...the first published poem of a Japanese-American woman who is, at present, an evacuee from the West Coast making her home in a War Relocation center in Arizona.” (32)

彼女の詩を通して、読者はようやく彼女の内なる声を聞くことができる。それは僧侶という社会的地位のある男（父）の内情を暴露する女（娘）の告白である。仏道を極めようとして家族に犠牲を強いた男が、強制収容と妻の死という偶然が重なって一種の悟りを得たとある。それは言い換えれば、妻が存在しなくなったことによって肉体的欲望を押さえる必要はなくなり、いわば去勢状態になったのにすぎない。彼は現実を逃避しようとした無力な男であり、一人精神的解脱を求めるエゴイストであり、マゾヒストでもある。家族を犠牲にして自分の世界に閉じこもる父親は、娘のセクシュアリティに深い影響を及ぼす。

キクが母親から聞いた話では、ミス・ササガワラの母は稀にみる優しい、立派な貴婦人であったそうである。夫に従順で世間的にも申し分のない典型的なこの一世の女性は聖母像を体現しており、対照的に未婚の娘は逸脱したイヴ像を体現している。この母の死によって、今までの家族の均衡関係が崩れてしまい、娘は父と二人だけで、収容所の一室にいわば「幽閉」された状態に陥る。

語り手はこのようなミス・ササガワラのおかれた状況について解説を試みているのである。

...it was told that he kept here in his apartment a small shrine, much more intricately constructed than that kept by the usual Buddhist household, before which, at regular hours of the day, he offered incense and chanted... What Miss Sasagawara do at these prayer periods, I wondered... (23)

上記の引用は、内も外もまったくプライベートがまったくない状態で、また父親の愛情も感じ

ることのできない生活のなかで、マリが孤独と虚無の深淵に落ち込んでいく様子を暗示している。

J. ギャロップはフェミニズムと精神分析との関係を論じるなかで、フロイトとイリガライの間に、精神分析という父と、ヒステリー娘をめぐる誘惑の関係を指摘している。つまり娘は父に愛されたい、承認されたいという満たされることのない欲望——マゾヒスティックな望み——があるために、公明正大で超然とした、欲望とは無縁の父の「法」（その法の覆いで自分の欲望を隠している）——を受け入れようとする（ギャロップ 128-75）。ミス・ササガワラにも潜在的な父の欲望に転位し、父に誘惑されたいという女性のエディプス・コンプレックスが暗示されていて、父親との強烈なエディプスの葛藤がみられる。父は娘の欲望から身を守らなければならない（前掲書 168）。なぜなら彼は理性（法）を最上のものと考え、人間本来の性の欲望を抑圧しようとするからである。

Charlotte Parkins Gilmanの自伝的小説*Yellow Wallpaper*(1892)のヒロインのように、閉じこめられることへの恐怖、すなわち沈黙の抑圧に対する恐怖がミス・ササガワラを錯乱させる。根源的な人間の欲望を抑圧された娘の苦悩が次のように描かれている。

Was it not likely that the saint, blissfully bent on cleansing from his already radiant soul the last imperceptible blemishes...would be deaf and blind to the human passions rising, subsiding, and again rising, perhaps in anguished silence, within the selfsame room? (33)

抑圧的な禁止を娘に求める父の法は、娘の生への情熱（エロス）と対立する。理性を押しつけようとする男（父）に対して、女（娘）は性的情熱の抑圧を芸術的情熱（詩作）へと昇華する。グーバーは「空白のページ」の比喩を用いて、女性を空白や受動性と同一視する家父長制的な見方に対する過激なまでの破壊性を訴えている（367）が、ヤマモトはこの作品の最後の部分で読者に混乱をもたらす。

父の「法」に対する娘の反逆が、キクによって次のようにパラフレーズされている。

This man was certainly noble, the poet wrote, this man was beyond censure. The world was doubtless enriched by his presence. But say that someone else, someone sensitive, someone admiring, someone who had not achieved this sublime condition and who did not wish to, were somehow called to companion such a man (33).

世間的には全く非のうちどころのない父に対して、娘は内面の情熱を押さえることができず、その結果彼女の自我は分裂し自己嫌悪を増殖させ、罪悪感に打ちひしがれて狂気に陥ってしまうのである。狭い一室同居していながら、父は娘の肉体的、精神的苦悩を理解することができなかつ

セクシュアリティと狂気——ミス・ササガワラと強制収容所

たのだろうか。娘の狂気は、このような父への恐怖と怨念に基づいており、収容所に入ることで禁欲的な生活が保障され社会的責任から逃れることができ、自由を感じる父の異常さを娘は激しく断罪する。彼女の告白的な詩はこれまで支配的であった家父長制イデオロギーの虚構性を暴露している。

...this man's devotion as a sort of madness, the monstrous sort which, pure of itself, might possibly bring troublous, scented scenes to recur in the other's sleep (33).

男は地上のあらゆる欲望を捨て去り、崇高な境地に達したつもりでいるが、現実には妻や娘に対して愛情を示すこともなく、あまりにも利己的な自己実現である。それは娘の訴えにもあるように狂気であり、そして理性と狂気が交錯しその境界が限りなくあいまいになっていく。度重なるミス・ササガワラの病院への逃避は、こうした父の狂気から逃れようとする無意識の試みだったのではないだろうか。理性によって娘の情熱を閉じこめることに対する抗議、つまり彼女の病は父の無言の抑圧に対する抵抗であると考えられることもできる。

また人種差別的な強制立ち退きによって、日系人たちは不潔で悪臭のたちこめる家畜場を改造した仮収容所や、さらに内陸の砂漠にあった強制収容所の狭いバラックの一室に日系人を隔離し、ミス・ササガワラのように、父娘が押しこめられるというアメリカ政府の非人道的行為こそまさに「戦争ヒステリー」という狂気なのではないだろうか。たしかに強制収容所に入って、これまでのように人種的偏見や差別にさらされることもなく、あくせく働かなくても最低限の生活ができるとして満足する人もいた。しかしそれは多くの人々にとって、とくに若い人々にとって人間らしく生きることではなかった（市村 48）。彼女のような自由やプライバシーに鋭敏な芸術家は、一層内面における願望や幻想との葛藤を余儀なくされた。

1944年によく連邦最高裁は、収容者三分の二を占める日系人二世に対して強制収容を断行した大統領命令に違憲の判決を下し(Ball 184)、軍人や政治家がいかに誤った判断を行なったかを認めた。したがって彼女の病は、日系人への強制収容を行なったアメリカ政府に対する抗議であると考えられるだろう。日系人である彼女は敵性外国人として他者化され、性差文化が支配的な収容所内においても逸脱した女とみなされて、二重に他者化されていた。

ミス・ササガワラの「伝説」は周囲の無理解な人々が作り上げた伝説であり、彼らが結婚しない自由奔放な美しい女性に対する羨望と、家父長制からはみ出したことによる排他的な感情から生まれた言説——ヒステリー女=性的欲求不満=狂女——という作り話である。前述のミス・エミリーのようにミス・ササガワラもまた「墮落した偶像」(“fallen icon”)⁽⁶⁾として表象されていた。しかしヤマモトはミス・ササガワラの詩をキクにパラフレーズさせることにより、狂気の内面が語られ、一方的に語られてきた物語を脱構築させ、いままで隠されていた真実を暴露する。女は

常に男によって語られる存在（角田 55）というこれまでの女性像＝女の神話をヤマモトは解体したと言える。

注

- 1 *Desert Exile*(1982)のなかで、Yoshiko Uchidaは父親がF B Iに逮捕される様子を描いている(46-51)。
- 2 ヤマモトはCharles L.Crowのインタビューで、“The Legend of Miss Sasagawara”は実在の女性に基づいて書かれたと述べている。またそのモデルとなった女性について次のように説明している。
 “...she later died at the age of 58 in a nursing home in Los Angeles. And I found out that she really was a writer, which I didn't know when I wrote the story, that she had written a lot of poetry when she was younger, for the same Japanese newspapers.” (“A Mellus Interview” 79-81)
- 3 彼女はCheungのインタビューに次のように答えている。
 Southern California has always been a melting pot, at least in my experience. I gradually became aware of discrimination and when we Japanese were singled out for mass detention during the war, that really opened my eyes to what prejudice can lead to (Yamamoto 1994, 78-9).
- 4 Kimもまた同様の発言をしている。
 Because few Japanese Americans could escape from the implications of the war and the internment of the mainland Japanese Americans many works of Japanese Americans literature are linked to the internment experience (Kim 148).
 また三世でUCLAのアジア系アメリカ研究センターの室長をしているドン・ナカニシは、日系人にとって強制収容は集団的記憶として重要な意義をもつとして次のように述べている。
 To be a Japanese American, I believe, should mean that the Internment remains at the forefront of our collective memory, and the basis of the most distinct contribution that we can make to society (Nakanishi 31).
- 5 Ansel AdamsやDorothea Langeなど著名な写真家はWRAの要請で日系人の強制収容の写真を撮影している (Partridge 81-89)。
- 6 Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood* Athens: The U of Georgia P, 1994. 125.

参考文献

- Ball, Howard. “Judicial Parsimony and Military Necessity Disinterred: A Reexamination of the Japanese Exclusion Cases, 1943-44” Daniels, Roger et al eds. *Japanese Americans From Relocation to Redress*. Seattle: U of Washington P. 1991.
- Crow, Charles L. “A Mellus Interview: Hisaye Yamamoto” *MELUS* 14.1 (Spring 1987) U of Massachusetts at Amherst.
- Cheung, King-Kok.ed. *Women Writers: Texts and Contexts—Hisaye Yamamoto, “Seventeen Syllables.”* New Brunswick: Rutgers UP. 1994.
- *Articulate Silences*. Ithaca: Cornell UP. 1993.
- ギャロップ、ジェイン『娘の誘惑——フェミニズムと精神分析』渡部桃子訳、勁草書房、2000年
- ギルバート、サンドラ、グーバー、スーザン『屋根裏の狂女』山田晴子、藪田美和子訳、朝日出版社、1992年
- 檜原美恵「Wakako Yamauchi」植木照代、ゲイル・K・佐藤編『日系アメリカ文学』創元社、1999年

セクシュアリティと狂気——ミス・ササガワラと強制収容所

- フーコー、ミシェル『狂気の歴史』田村はじめ訳、新曜社、1988年
- フェルマン、ショシャナ『文学的事象と狂気』土田知則訳、水声社、1993年
- Hongo, Garrett. Introduction of Wakako Yamauchi's *Songs My Mother Taught Me* ed. and with Introduction by Hongo, Garrett and Afterword by Valerie Miner. New York: The Feminist Press at The City U of New York, 1994.
- 市村孝子「ヒサエ・ヤマモト “The Legend of Miss Sasagawara” におけるセクシュアリティ」植木他編 *ALA Journal* No.4. アジア系アメリカ文学研究会、1997年
- Kim, Elaine H. *Asian American Literature*. Philadelphia: Temple UP, 1982.
- McDonald, Dorothy Ritsuko and Newman, Katharine. “Relocation and Dislocation: The Writings of Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi” *MELUS* 7.3 (Fall 1980)
- Mine, Okubo. *Citizen 13660*. Seattle: U of Washington P, 1998.
- 元山千歳「ホモセクシュアリティ」アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学』大阪教育図書、2001年
- Matsumoto, Valerie. “Japanese American Women during World War II” *Unequal Sisters*. eds. Vicki L. Ruiz & Ellen C. DuBois. New York: Routledge. 2000
- 水田宗子『フェミニズムの彼方』講談社、1991年
- 「女性の自己表現の現在——他者の発見と回避——」上野千鶴子他編『ニューフェミニズム・レビュー』vol. 2 学陽書房、1991年
- 『ヒロインからヒーローへ』田畑書店、1982年
- 「女性論の行方」『国文学』學灯社、1986年
- Nakanishi, Don T. “Surviving Democracy's Mistake!: Japanese Americans & the Enduring Legacy of Executive Order 9066,” *Amerasia Journal* 19 (Winter 1993)
- 中山容、新井弘泰編・訳『日系アメリカ・カナダ詩集』土曜美術社、1985年
- Partridge, Elizabeth. *Restless Spirit: The Life and Work of Dorothea Lange*, New York: Viking, 1998
- Rolf, Robert T. “The Short Stories of Hisaye Yamamoto, Japanese American Writer” in *Women Writers*
- 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』リーベル出版、1995年
- Takami, David. *A Divided Destiny*. Seattle: U of Washington P. 1998.
- タカキ・ロナルド『もう一つのアメリカン・ドリーム』阿部紀子・石松久幸訳、岩波書店、1996年
- 武田美保子「言語のセクシュアリティ」『読むことのポリフォニー』ユニテ、1992年
- 角田信恵「プロットの逆説」『読むことのポリフォニー』ユニテ、1992年
- チョウ、レイ『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳、青土社、1998年
- 植木照代「Hisaye Yamamoto」植木他編『日系アメリカ文学』創元社、1997年
- 上杉忍『二次大戦下の「アメリカ民主主義」』講談社選書メチエ、2000年
- Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllbles and other Stories*. New Brunswick; New Jersey: Rutgers UP, 1998. (本書の引用はすべてこの版による。また頁数のみを記す。)
- “I Still Carry It Around” *Woman Writers*. Rutgers UP. 1994.
- Yogi, Stan. “Japanese American Literature” Cheung, King-Kok. ed. *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, Cambridge: Cambridge UP, 1997.